

**私** は大学に在籍し、かつ、河川工学を専門  
としていたため建設現場とは少し離れた  
ところにいるが、土木分野に関わるものとして  
経験を踏まえ少し書かせていただく。

男性が占める割合が多い土木の道を選んだ学  
生時代、私は女性だからと言われること、特別  
扱いをされることが嫌でたまらなかつたし、女  
子学生の会など女子で集まる機会を避けてきた。  
できるだけ平等でありたいとの想いがあり、特  
別なことが嫌だった。しかし、年を重ねるにつ  
れ、男女平等と言っても女性にはできないこと  
があり、女性ならではの役割があるのだと思え  
るようになった。最近は、努力してもできない  
ことを自他ともに認識し、できない分は別のこ  
とで補うことが重要だと感じている。これは女  
性に限られる話ではないが、特に女性はどうし  
ても体力面で男性に劣ることが多いことは認め  
ざるを得ない。

最近、女性がより良いイメージを与えること  
で、大学の宣伝などでも女子学生が起用される  
ことが多い。男性の多い職場では、本人が望ま  
なくても周囲は女性であることを認識して行動  
せざるを得ず、良い意味でも悪い意味でも目立  
つことになる。つまり、女性は良くも悪くも差  
別を受けており、それを無意識でも受け入れて  
いることが多い。女性はそれを認識し、何が平  
等であるべきで、何が平等ではないのかを  
考えて行動すべきであろう。そして、周囲も女

各 人 各 説

## 女性進出が望まれる 建設業界に向けて

名城大学理工学部社会基盤デザイン学科 准教授

溝口敦子

Atsuko Mizoguchi



性をひとくくりにしなければ、一個人が尊重され、  
それぞれが有意義に仕事できるはずである。  
最後に、家庭も仕事も…とよくばりな希望を  
持つ女性にとって産休・育休は非常にありがた  
い制度であり、私も利用させていただいた。経  
験のない一人目の出産時、大変さを想像できず  
に育児以外何かできると期待し、あわせて、迷  
惑をかけては…と休みを短期間にした結果、ふ  
らふらになりながら職場復帰を果たした。この  
経験に学び、一人目で数カ月だった育児休暇は、  
二人目の出産時にはしっかりとることにした。  
ただし、仕事を休んだブランクは休んだ期間以  
上に本人にのしかかる。育児後、休み分を取り  
返そうとしても育児などで思うようにできない  
ことは、周囲が思う以上に悩みの種になる。こ  
うしたことが様々な現場で活躍する女性にどの  
ようにのしかかるか、全てを想像することはで  
きないが、毎日、様々な葛藤があることは間違  
いない。その後、どの程度仕事に打ち込めるか  
は、本人のやる気・能力と、家庭・職場のフォ  
ロー次第でもある。少なくとも今も私が働き続  
けられているのは、周囲の支えがあつてこそと  
言える。この業界が女性進出を望むならば、家  
庭を持つ人、持たない人を含め様々な意見を聞  
き、状況に合わせて臨機応変な対応が可能な、  
かつ、本人とその周囲、そして業界全体が活性  
化するような本業界にあったシステムをぜひ作  
ってほしいと願う。